

子どもたちの笑顔のために

—中東地域に広がった幼児教育ボランティアの軌跡—

中東地域に対する JICA の幼児教育ボランティアの派遣は、1992 年のモロッコから始まりました。90 年代後半には、シリア、ヨルダン、チュニジア、エジプトへと広がり、これまで約 20 年で派遣されたボランティアは 140 名を超えています。「子どもたちを笑顔にしたい」と活動する JICA ボランティアが現地の先生たちの意識を変え、幼稚園や保育園を変え、省庁をも動かしていきました。

エジプトでは、こうしたボランティア一人一人の草の根レベルでの地道な努力と粘り強い取り組みがエジプト保育行政を動かす原動力となり、2008 年のボランティアプロジェクト、そして 2017 年の技術協力プロジェクトにまで繋がっていきました。中東の幼児教育ボランティアはこれまで、どのような足跡をたどってきたのでしょうか。

1996 年／シリア

赴任前、日本には中東地域における幼児教育の情報はほとんどなく、赴任してしばらくはシリアの首都ダマスカスの幼稚園を巡回し、現地の様子を把握する日々が続いた。

3 歳から 5 歳のクラスで目にしたのは、先生が前に立ち黒板に書いた文字や数字を子どもたちが元気よく唱和する、日本でいう小学校の教室のような光景だった。子どもたちは室内いっぱい置かれた細長い机にぎゅうぎゅう詰めに座り、熱い視線を先生に注いでいた。授業の合間に先生が 50 人ほどの宿題ノートを添削する間、子どもたちはただ座っているだけだった。「遊ぶ場所さえあれば」「遊具さえ十分にあれば」という思いがした。

当初は、どこの幼稚園でも「こんなところでどうして日本人がいるの?」、「こんな片言で何ができるの?」と、先生も子どもも興味津々に質問を投げかけてきた。ボランティアを要請した幼稚園を所管する省庁が送り込んだ監視人、と誤解されることも度々あった。信頼を得るためには、その国の文化を受け入れ楽しむ姿を見せることが重要であると徐々に分かってくると、先生たちとお茶の時間をたっぷり楽しみ、雑談の中で日本の幼稚園の話をしたり、写真を見せたりした。「素敵なお幼稚園ね」「おもちゃもいっぱい」と、遠い日本の幼稚園に想像を膨らませる先生たちが一人また一人と増えていった。「でも、ここにはそんなお金はないからできないわ」と、諦めに近づきも耳にした。スーク(市場)を歩き回ると、伝統工芸品が今も息づき、手の届くところに素材や技術があるのを知った。これを幼児教育の現場に生かすことはできないかと、次第に現地の先生たちと考えるようになっていった。

こうして、2 年間で現地の関係者に伝えられたことは、唯一「勉強以外に子どもと過ごす楽しい時間が幼稚園にも必要なこと」であった。



勉強以外の時間を楽しむ「手遊び」を現地の先生に伝える講習会の様子

(小山祥子／元 JICA ボランティア)

JICA ボランティアたちは、多くの課題を抱えながらも我慢強く現地の人と関わり、信頼関係を築き、そして現地の良さを見いだそうとします。シリアの場合、小山さんの活動が現地の上層部から理解され、高く評価されたことで、1つの地域に複数のボランティアが派遣されることになりました。

「遊びを通した学び」への理解を得るために

中東では、幼児教育は小学校に上がるための準備教育という意識があり、読み・書き・算数を教えることが重要だとされていました。JICA ボランティアたちは、子どもの発達に即した「遊びを通した学び」が特徴的な日本の教育方法との違いに戸惑い、頭を悩ませます。また、シリア人の保育者側も、ボランティアが伝えようとしている「日本式の保育」を理解できずに苦しみ、その導入にためらいを感じていました。そうした中、JICA シリア事務所が、JICA の国内機関の一つである横浜国際センターを通じて鶴見大学の協力を得て、隊員の同僚らシリアの幼児教育関係者を日本に招き、乳幼児教育集団研修を実施しました。これをきっかけに、現地に大きな変化が生まれます。

2005年／シリア

集団研修へ参加したのを境に、シリア人側にもボランティア側にもいくつかの変化が生まれた。

シリアからの研修員たちは、日本の保育現場や養成校で、初めて「子どもの発達には遊びが重要」という考えを目の当たりにした。当時のシリアには保育者の資格も免許も存在せず、研修員たちのほとんどは専門教育を受けたことがなかった。研修に参加したことによって「シリアに適した保育環境とは何か」という専門的な問題意識を持つことができ、今のシリアの子どもたちに必要な「学習と遊びが共存する保育」をテーマにした「遊びの部屋プロジェクト」が生まれた。これは、伝統の中に新たな手法を導入するというシリア式の保育改革でもあった。従来の学習机が並んだ保育室とは別に、新たに教材や遊具を配置した「遊びの部屋」を設置し、多様な体験学習ができる環境づくりを目指した。すると、学習能力や思考力の向上、ルールの学習、他者との協力的な関係作り、また入園児数の増加といった変化が現れ始めた。

このように研修員たちが主体的に動き始めると、これまで、主に保育者モデルとしてリーダーシップを発揮してきた JICA ボランティアたちの活動姿勢も変化し、「主役は現地の人々」を合言葉に、「黒子」としてシリア人の考える保育の実現をサポートするようになった。

さらに、毎年集団研修に参加することや、カリスマ的なシリア人リーダーの存在、JICA シリア事務所の「研修員同窓会」によるバックアップ体制があったことも影響し、シリア人研修員同士の仲間意識と連帯感が高まった。こうして「シリア研修員チーム」が生まれ、このチームの活動によって「遊びの部屋プロジェクト」はシリア全国に拡がり、本格化していった。

(星順子／元 JICA フィールド調整員)



「遊びの部屋」では、自分で玩具や教材を選択することができる

シリアで個々のボランティアによる「点」の活動の成果が出てくると、より広範囲に、国レベルでの普及を進めるため、複数の JICA ボランティアによる「面」の活動が始まりました。

シリアから中東諸国へ

1990年にタイのジョムティエンで開催された「万人のための教育世界会議」で、「万人のための教育（Education for All）」をスローガンに、すべての人に基礎教育を提供することを世界共通の目標とするという国際的なコンセンサスが形成されました。これにより、幼児教育が基礎教育として位置付けられ、ユニセフやユネスコの支援によって各国の教育省の中に就学前教育局の設置が進められたことを背景に、次第にシリア以外の中東諸国にも JICA の幼児教育ボランティアが派遣されるようになっていきました。

しかし、ボランティアの要請はあるものの、シリアのようにはなかなか理解が得られない国もありました。

2000 年代／エジプト

JICA ボランティアの目にエジプトの幼児教育現場は、現地保育士の知識が不十分であり、衛生面の意識も低く、読み書きや算数などの教育に偏重しているように見えた。

ボランティアたちは、日本での経験を生かし、配属された保育園で、遊びなどの実技を通じた保育の実践や園内の衛生改善など、さまざまな取り組みを実施した。同僚の保育士たちは、この取り組みに対し高い理解を示しつつも、ボランティアを代替の保育士のように捉え、自分たちは保育業務に関わらなくなるという状況が各保育園で発生し、ボランティアと同僚保育士との協働という点で大きな課題となった。

ボランティアたちは、この課題を克服するためには、現地の保育士に対して個別に指導や助言をするより、グループ化することで彼らのプライドを傷つけずスムーズに保育技術を支援できると考え、ワークショップの企画と実施に取り組んだ。

このワークショップは、現地保育士に保育技術を伝える点では一定の成果を収めたが、企画から運営まですべてボランティアが担っていたため負担が大きいほか、開催時期によっては保育士の欠席が目立つなど、まだ課題が多く残るものだった。

(鶴田宏幸／元 JICA ボランティア・コーディネーター)

2000 年代前半／ヨルダン

ヨルダンの公立幼稚園は、同国の教育改革計画の一環として 2004 年から既存の小中学校内の付属園として設立された。当初 8 クラスだった幼稚園は、2011 年には 1,000 クラスを超え、全国各地で加速度的に増加した。そうした中、日本の情操教育を導入すべく、2008 年に教育省へ JICA の幼児教育ボランティアの派遣を開始した。当時の現地幼稚園教師は、配置転換された小中学校教

師や、十分な幼児教育訓練を受けていない新卒者で、手探りで授業を進めるような状態であった。

各地区の教育局担当者や幼稚園教師の幼児教育に対する認識はまだまだ低かったため、JICA ボランティアが周辺の幼稚園で授業したりワークショップを行なう提案をしても許可されることはほとんどなく、期待されたのは増加するクラスの運営だった。そうした中、慣れない異文化での生活、学校長や担任教師との人間関係に苦勞するボランティアも少なくなかった。

このような現状を打開すべく、JICA は、配属先の学校や地区教育局および教育省本省との打ち合わせを重ね、ボランティアの配属先を個別の学校ではなく各教育局にすることで、各地区の事情に合わせてボランティアの活動方法を決めるとともに、管轄内の幼稚園の運営状況を把握できるようにした。その結果、徐々に教育局が主体となって各地区のヨルダン人教師を対象とした幼児教育ワークショップや、他園での巡回活動、ボランティアとヨルダン人教師との共同授業などができるようになった。

(伊藤牧／元 JICA ボランティア・コーディネーター)

エジプト、ヨルダンとも日本人にはなじみの薄いアラビア語での活動であるにもかかわらず、ボランティアは非言語コミュニケーションを含めながら、現地の子どもたちを引きつける遊びを紹介していきます。しかし、当時はまだ現地の先生方にとって JICA ボランティアはクラスを任せる「お手伝い」として扱われることが多く、ボランティアから保育手法を学ぶという意識は希薄でした。そうした中でも、活動にさまざまな創意工夫を凝らし、徐々に現地の先生方の認識や視点を変えるきっかけができました。

国を超えて活動を分かち合う

通常、JICA ボランティアは、派遣前にさまざまな国へさまざまな職種で派遣される人たちが訓練所（日本）に集い、約 70 日間の派遣前訓練を受けます。そこで築いたネットワークを使い、それぞれの国に派遣された後も、お互い情報交換をすることがあります。

中東地域のボランティアは、情報交換を行ううちに共通の課題を抱えていることに気づき、2004 年にシリアで、翌 2005 年にはヨルダンで、情報共有と課題克服に向けたセミナーを企画・実施しました。そして、2006 年にはイエメンとモロッコを加え、エジプトで幼児教育広域研修（現、在外研修）を開催し、規模を拡大していきます。広域研修には、ボランティアだけでなく任国のカウンターパートや先生方が参加し、お互いの教育手法を紹介し合い、課題に対して意見交換を行います。ここでボランティアとカウンターパートが課題を共有することは、その後の活動を前進させる大きなきっかけともなります。しかし当時は、すでに現地の理解を得ていたシリアと、そうでないエジプトとヨルダンの間に大きな意識の差があったことは否めない現実でした。（情報提供：鶴田宏幸／元 JICA ボランティア・コーディネーター）

エジプトのボランティアプロジェクト

青年海外協力隊の活動は「草の根の活動」と呼ばれています。個々の JICA ボランティアは、現地の人との信頼関係を軸に、幼児教育における「遊びの大切さ」を伝えています。しかし、現地の先生方の理解を得ることと、それを他の地域の先生方にまで広げることとは別の問題です。他の地域まで広げるためには、現地の先生方だけでなく、保育園を統括する省庁等の理解を得なければなりません。2006 年に中東諸国のボランティアおよび幼児教育関係者を招き開催された広域研修を契機に、エジプトでは「実技から学ぶ保育実践プロジェクト」が立案されました。

2006～2008 年／エジプト

2006 年の広域研修後、JICA と社会連帯省が協議を続けた結果、2008 年から 5 年間にわたって、保育園のみならず社会連帯省内でも JICA の幼児教育ボランティアの活動や成果を集約するプロジェクトが行われることになった。このプロジェクトの発足により、これまでボランティアが独自で企画・運営してきた幼児教育セミナーを社会連帯省と連携して実施することで、ノウハウを現地と共有できる理想的な活動形態が整った。

その一方で、パイロット地域(首都カイロ近郊を中心とした 5 地域)から外れた任地に派遣されているボランティアにとっては、後任ボランティアの派遣が見込めないため、今後の活動や計画を変更せざるを得なくなった。しかし、パイロット地域以外のボランティアたちは、逆境を逆にとり、残された時間を効果的に利用して、社会連帯省に対して彼らの活動を積極的に紹介した。

その取り組みの一つとして、社会連帯省の保育行政担当官を招き、幼児教育セミナーを各任地で実施した。これにより、普段、保育現場に向かうことの少ない社会連帯省側に、地方の保育現場の現状を認識してもらうことに成功し、現場の過酷な実態を知った社会連帯省から、それら保育園に対して多額の保育予算が配賦されることになった。この補助を受けたいいくつかの保育園では、ボランティアのアイデアで、子供用のトイレが改装されたり、子どもの背丈に合った手洗いが設置されたりと、大きな変化を遂げる結果となった。

このように、パイロット地域以外のボランティアたちの活躍も社会連帯省に対して大きなインパクトを残したことは、この後プロジェクトを進める上で大きな後押しとなった。

エジプトに幼児教育ボランティアの派遣が開始されて以降、ボランティア一人一人による草の根レベルでの地道な努力と粘り強い取り組みがエジプト保育行政を動かす原動力となり、2008 年に開始されたボランティアプロジェクトへと繋がっていった。プロジェクト実施中も、ボランティアたちはさまざまな困難に直面しながら、社会連帯省という心強いパートナーとともに現地保育士の指導力向上に向けてまい進し、延べ約 1,500 人以上の保育士や保護者に対してセミナーを行うなど、エジプトの幼児教育分野に大きく貢献した。

(鶴田宏幸／元 JICA ボランティア・コーディネーター)



JICA ボランティアが開催した幼児教育セミナーの様子

中東の治安悪化をきっかけに活動を中断

2005年から日本で行われたシリアの集団研修に加えて、2008年にはエジプトやヨルダンなどから関係者らを招いた中東地域の幼児教育研修が横浜市にある鶴見大学で行われました。この研修を受けた関係者らが各国で JICA ボランティアの強力なサポーターとなり、幼児教育における「遊びの大切さ」に対する理解を飛躍的に伸ばします。シリア、エジプトに続いてこの研修に加わったヨルダンからも、ボランティアたちから喜びの声が届けられるようになった 2010 年 12 月、チュニジアでの反政府運動から「アラブの春」が起きました。治安悪化により、まずはエジプトが、続いてシリアのボランティアが退避することになりました。シリアのボランティアたちはその後も任地へ戻ることはできず、残りの任期をヨルダンで活動することになります。

せっかく現地の人と築き上げてきた活動が中断される事態となりましたが、派遣国を「第2の故郷」と呼ぶボランティアたちと現地の人々との絆は消えることはありませんでした。

2011 年／シリア

2011 年 3 月、日本で東日本大震災が起こったのと同様、シリアでは他のアラブ諸国から遅れてデモが始まった。当初、デモが起こる金曜日には外出禁止が指示されるものの、変わらない日常は続いていた。しかし 4 月中旬になると、JICA ボランティアの一時帰国が決まった。当時は、ボランティアもシリア人保育者もすぐに活動は再開できると信じていた。

しかし情勢は悪化の一途をたどり、再派遣の目処

は立たず、ボランティアはヨルダンへの任地変更となった。彼らにはそれぞれ活動計画があり、シリアでの活動を終えられなかったことへの無念さが強かったことだろう。シリア人保育者たちも、これまで積み重ねられてきた活動やボランティアとの交流が途絶えたこと、また、その年の夏に開催される予定だった中東広域研修や、毎年恒例となっていた日本での研修に参加したいとの期待があり、ボランティアと同じように残念に思っていたに違いない。

その後、退避していたボランティアやシリアの幼児教育関係者を中心に、これまでシリアに派遣されてきた幼児教育ボランティアの活動をまとめたいという声上がり、15 年にわたる活動を写真展で紹介することを決めた。写真展のテーマは、「シリア・アラブ共和国 幼児教育を通じた活動の歩み～点から線へ、線から面へ～」。15 年間で活動した 42 人の関係者のうち、18 人から写真の提供を受けた。首都へのたった一人の派遣から始まり、個々のボランティア活動からボランティア同士のつながりへ、そしてシリア人保育者同士のつながりへと変化していく様子や、シリア国内に「遊びを通じた学び」という視点が広がりつつあった様子などを伝えた。

写真展は、2011 年 10 月の大阪での開催を皮切りに、北は青森から南は福岡まで、2 年間で 16 回にわたって開催した。任期半ばで活動を中断した悔しさや、シリアでの活動の変遷を知ってほしいと



写真展の様子

いう思いからスタートした写真展だが、回を重ねていくうちに、日本で知られていない平和なシリアの様子や、シリアで力強く笑顔で働く保育者、楽しく遊ぶ子どもたちの姿を知ってほしい、より多くの人にシリアに関心を持ってもらい、シリアに平和が戻る日を共に願ってほしいという思いが強くなっていった。

写真展の様子は、現地の保育者や関係者にも伝えられると、シリアを離れてもボランティア同士やシリア人保育者がつながり合い、シリアの幼児教育やシリアの現状について発信していることを大変喜んでくれた。

(三谷直美／元 JICA フィールド調整員)

エジプトは、2011年に JICA ボランティアが退避した後、一旦は再派遣となったものの、政情不安により再度、退避となりました。

2013年／エジプト

2008年より開始されたプロジェクトは、2011年の革命による JICA ボランティアの避難一時帰国、その後の不安定な国内情勢の影響を受けながらも、着実に前進を続けていた。2012年夏には革命の中心地であったタハリール広場が全面的に解放され、隣接する社会連帯省でのボランティア活動が本格的に再開されたことで、ボランティアのグループ型活動はいよいよ活発化していった。

この機を逃さぬよう社会連帯省とボランティアは 2013年3月に保育関係者向けに「遊びを通した学びセミナー」(3日間)の開催に動いた。国内情勢により開催は5月に延期されたものの、セミナーはプロジェクトの対象5地域に今後展開が見込まれる地域を加えた計10地域から、約100名もの参加者を集めた。「遊びを通した学び」を保育現場に取り入れるための実践的なセミナーは好評を博し、参加者はそれぞれの地域の課題を明確にし、今後のアクションプランを作成した。ボランティアと共に課題への取り組みを始めた矢先の6月下旬、エジプトで再び政変が起きた。

当初、国内退避を余儀なくされた幼児教育ボランティアは、外出もできない退避先の限られた環境で、活動再開に向けた準備を日々続けた。しかし8月中旬にはさらに治安の悪化が懸念される状況となり、日本へ一時帰国することになった。

帰国すると、ボランティアは、治安が安定する保証のないエジプトへの帰任を待つか、ボランティアを必要としている近隣の国での活動に切り替えるかという、厳しい選択を迫られた。限られた2年間という活動時間が日々減り続けるのを無駄にはしてはいけないと思う一方、エジプトで帰任を待っている現地の人たちへ責任を果たしたいという2つの思いに揺れるボランティアたち。ある者は任国変更を希望し、ある者はエジプト帰任の可能性に賭けたが、幼児教育ボランティアたちの選択は、一人一人が自分で決断した結果、全員が後者だった。その決断に応えるようにエジプトの国内情勢は徐々に落ち着きを取り戻し、避難一時帰国から約3か月後、幼児教育ボランティアはエジプトに帰任を果たした。

(梶井勇輔／元 JICA ボランティア・コーディネーター)

ヨルダンでの活動が、線から面へと

「アラブの春」をきっかけに中東情勢が混迷していく中、シリアやエジプトとは対照的に、派遣先を変更した JICA の幼児教育ボランティアが集まった結果、ヨルダンのボランティアの数は増加しました。力のあるボランティアたちがヨルダンに集結したことで、活動が前進していきます。

2009 年／ヨルダン

JICA ボランティアの取り組みがヨルダン全域に広がっていったきっかけは、2009 年に開催された 2 つの研修である。まずはシリアでの広域研修にボランティアとそのカウンターパートが参加し、その後、日本における中東幼児教育研修に教育本省が参加した。この研修の報告会には、全国 140 人の幼稚園教師および教育局関係者が出席し、「遊びを通じた学び」をベースとした研修内容を広く啓蒙する機会となった。

この影響で、ヨルダン人教師を対象とした幼児教育ワークショップは次第に各地区で定例化し、各地区のボランティア同士でも、ワークショップの進め方や教材などについて情報を交換する勉強会を定期的に開催するようになった。さらに、このワークショップに他の地区や関連職種のボランティアも参加することで、ワークショップの質は大いに向上し、公立だけでなく私立の幼稚園も参加するようになった。

翌 2010 年に行われた広域研修、中東幼児教育研修の報告会が開かれたころ、各ボランティアは、教育本省が教師向けに発行しているアラビア語の幼児教育指導要領の日本語訳に着手した。これは、ボランティアが指導要領の内容を把握することで、そこに記載されている知識偏重の詰め込み教育の実態を再確認することが狙いであった。指導要領は、本来であれば各ヨルダン人教師がそれに従って授業を進めるものだが、実際には使用していない学校も存在し、教師は大まかな時間割に沿って授業を進めている状況であった。同時に、各ボランティアが作成した教材の蓄積が相当数になっていたこともあり、教育本省に働きかけて、共同でアラビア語の教本「幼児のための教育活動指導書」を作成することになった。ボランティアは交代で教育本省に詰め、時間はかかったものの、出来上がった教本が全国の学校に配布されるまでに至った。

(伊藤牧／元 JICA ボランティア・コーディネーター)

2015 年／ヨルダン

ヨルダンでは、JICA ボランティアはさらに効果的な活動を目指し、各園から各地区の教育局へと配置を変え、現在は担当園を巡回しながら各地区の現場における幼児教育の質を高めることを目指し



教本を使ったワークショップ

て活動している。

これまでにボランティアが築いてきたネットワークや開催したワークショップは、各地区教育局のみならず教育本省でも一定の評価を受けており、さらなる教育手法および教師の質の向上のため、ボランティアおよび JICA ヨルダン事務所としてどのような協力が可能かを模索する段階にきている。

中東地域は 2010 年の「アラブの春」以降、各国で政情不安および治安悪化が続き、広域研修を開催できない状況が 5 年続いていたが、一部地域において状況が安定してきたことと、ヨルダン国内における幼児教育のこうした機運の高まりを受けて、これまでシリアやエジプトがリードしてきた広域研修を、2015 年にはヨルダンで開催することになった。

研修の企画に当たっては、中東各国の幼児教育分野の取り組みは、JICA ボランティアの活動の進捗や環境によって多種多様であることを考慮し、事前に各国のボランティアが抱えている課題について調査を行った。また、この研修の中で、日本における幼児教育研修に参加したヨルダン人教師による報告およびその経験を踏まえた実践報告を行った。このことにより、各国の教師にとって研修内容がより身近なものとなっただけでなく、発表者本人にとっても、その後の活動をより積極的かつ主体的に行う動機付けとなったといえる。

現在では、各地区の教育局が主体的に現場の改革に取り組んでおり、それを現地の教師たちが前向きに受け入れられる雰囲気、ヨルダン各地で醸成されつつある。

(中道正人／元 JICA ボランティア・コーディネーター)

「5 年ぶりとなる中東広域研修の開催は、先輩ボランティアがこれまで繋いできた灯を途絶えさせてはいけないという思いでした」(北川涼子／元 JICA ボランティア)

それはヨルダンだけでなく、活動に制限があるエジプトも含めて、今自分たちができることをと考えた結果のようです。先輩ボランティアたちの「子どもたちのために最善を」という思いのたすきを引き継ぎながら走り続けるボランティアの姿がここにあります。

そして、これから

JICA の幼児教育ボランティアと触れ合った現地の子どもたちが、園での生活が楽しいと目を輝かせながら保護者に話をする中で、勉強中心の教育を望んでいた保護者の意識も少しずつ変わっています。また、「遊びを通した学び」の大切さを理解した現地の先生方によって保育環境が整えられ、時折、振りかざされるアサーヤと呼ばれる棒を恐れて引きつっていた子どもの顔が笑顔に変わってきています。しかし、保育制度の問題点や理論中心の教員養成など、ボランティア活動だけでは解決できない課題は、まだまだたくさん残っていました。

エジプトでは 2017 年 6 月から 3 年間、技術協力プロジェクト「就学前の教育と保育の質向上プロジェクト」が実施されます。これは、エジプトで実施されたボランティアプロジェクトの成果が認められてこそ、要請があったと言ってよいでしょう。当プロジェクトを踏まえ、ボランティアのグループ型派遣も効果的に組み合わせることも検討されています。現地の関係者が保育の重要性を「知っている」段階から「実践している」段階へ

と、今後の展開が期待されています。

制度や教員の養成など、課題は現在でもたくさん残っているものの、「遊びを通した学び」の大切さを理解した現地の先生によって、保育環境は着実に整えられています。

2015年／ヨルダン

ヨルダンでは、JICA ボランティア個人の力量によることなく、各地区とも同じ質の提案ができるよう、教育本省はボランティアと情報交換を行いながら、共同で『幼児教育のためのアイデア本』を作成した。

この本への教育本省の評価は当初から高かったものの、現場まで行き渡らせることが難しかったため、まずはボランティアが日々の活動の中で活用したり、現場の教師向けのワークショップで活用したりすることで、少しずつヨルダンの現場へと活用の幅を広げていった。

2014年には教育本省とJICAの共催で、各地区の教育局および教育本省など、現場の教師を指導する立場の職員を対象としたワークショップを開催することになった。このワークショップは、約1年間で指導者向けに4回、教育学部学生向けに1回、現場の教師向けに2回開催した。この結果、広域研修の再開が実現し、また各地区教育局によるワークショップはボランティアが配属されていない地区へも広がった。

ヨルダンでは、次のステップとして、現地教師のオーナーシップの向上を目的に、人的環境の整った地域からボランティア派遣を発展的に終了させることを目指している。これに伴い、ボランティアがいなくなる予定の地域では、スムーズな技術移転と維持ができるように活動形態を工夫している。例えば、2012年にボランティア主導で始めた地区合同運動会は、現在ではヨルダン人教師が主体となって進め、ボランティアがサポートしながらヨルダン人職員と運動会運営用のアクティビティーブックを完成させている。

一方、今までボランティアが派遣されていなかった地域や教育本省へボランティアを派遣することも協議されており、さらなる全国的な活動展開が期待されている。

(中道正人／元 JICA ボランティア・コーディネーター)



運動会の様子

2015年／エジプト

エジプトでは、JICA ボランティアの再赴任が決定した後も、5つのプロジェクト対象地域については情勢不安が残り、ボランティア不在の期間が長期化していった。

その中で各地域の保育関係者のモチベーション維持に努めたのは、社会連帯省家族子供部のカウンターパート(ボランティアの受け入れ担当)であった。彼はボランティアが避難している間も5地域に赴き、ボランティア再赴任の見込みやプロジェクトの今後について、時には自らの休暇を使い、何度も根気よく説明した。彼は口癖のように「これからはボランティアと共に活動した経験を持つエジプト人

が自分たちでやっていかなければならないんだ。私は〇〇ボランティアであり、△△ボランティアでもあるんだ」と、過去のボランティアの名前を語っていた。

また、もう一つ大きな力となったのが日本での中東幼児教育研修へ参加した各地域のカウンターパートたちである。この研修は、わずか 3 週間弱のプログラムにも関わらず、研修に参加して帰国したカウンターパートの多くには、明らかな変化が見られた。それまでは「日本の保育が良いのは施設が充実しているからだ」「お金や物がたくさんあるからだ」と言っていた彼らも、廃材を利用するなど、さまざまな工夫により実施されている日本の保育現場を目の当たりにし、「やる気になれば自分たちでもできることばかりではないか」と考えを改めた。さらに、この研修をより効果的にしたのはボランティアによる事前事後のフォローだった。研修参加前にはどこを注意深く観察すべきか詳細なブリーフィングを行い、帰国後は研修で学んだことを共に実践する。これを継続したことで、技術と自信を深めたカウンターパートには、ボランティアが帰国した後も、自分が地域を引っ張る存在になろうという意識が芽生えていったのである。

教育分野、特に初等教育は目に見えた成果は挙げにくく、評価が難しいかもしれない。ボランティアも 2 年間で大きな手応えを感じられない場合もあるかもしれない。しかし、数年ぶりにエジプトを訪れる元ボランティアは、現地の確実な進歩に例外なく驚きの声を上げる。ボランティアの地道な活動の連続こそが、2 度にわたる退避を経験しながらも、着実にエジプトで「遊びを通した学び」の芽を育てる原動力となったと確信している。

(梶井勇輔／元 JICA ボランティア・コーディネーター)

注釈

調整員・フィールド調整員・ボランティア・コーディネーター：

現地でボランティアのサポートを行う JICA スタッフ。呼び方が変移したため、本文では年代によって異なる表記をしている。